愛媛県愛南町におけるスルガラン（ラン科）の発見

Discovery of *Cymbidium ensifolium* (Orchidaceae) form Ainan-cho, Ehime Prefecture, Japan

早川宗志 [a,*]，黒萩芳明 [b]，徳岡良則 [a]

Hiroshi HAYAKAWA[a,*], Yoshiaki KUROHAGI[b], Yoshinori TOKUOKA[a],

[a]（独）農業環境技術研究所　茨城県つくば市観音台 3-1-3

[b] 愛媛県愛南町

[a]National Institute for Agro-Environmental Sciences, Tsukuba, Ibaraki 305-8604, Japan

[b] Ainan-cho, Ehime, Japan

摘要：九州西部に生育する絶滅危惧種スルガラン（*Cymbidium ensifolium* (L.) Sw.)を愛媛県愛南町において発見した．九州以外での本種の発見は珍しい上に、現在においても、本種を確認したことは生物保全学的に重要な知見であると考え，ここに報告する．

キーワード：シュンラン属，保全、絶滅危惧、ラン科

絶滅危惧種のスルガラン（*Cymbidium ensifolium* (L.) Sw.）を愛媛県愛南町において発見した。九州以外での本種の発見は珍しく、希少種の保全を考える上で重要な知見であると考え、ここに報告する。

ラン科シュンラン属は、10 種、1 変種、1 品種が日本に分布している（里見 1982)。しかし、シュンラン属は形態的・生態的変異が大きいため、植物学的・分類学的・形態学的研究が不十分な分類群もあり、再検討が必要である。しかしながら、日本産野生ランの中でもシュンラン属は園芸的な人気が特に高く、多くのシュンラン属植物が過度の盗掘により激減している（環境庁 2000)。そのため、再検討を要するシュンラン属植物も現在では野生条件下での発見が極めて困難な状況にある。

産地、分布、由来の再検討が必要なシュンラン属の分類群のひとつに、九州西部に生育するスルガランが挙げられる（渡辺 1978；里見 1982)。スルガランは、日本（九州西部)、中国、朝鮮、カンボジア、インド、インドネシア、ラオス、マレイシア、パプアニューギニア、フィリピン、スリランカ、タイ、ベトナムに分布する地生ランである（Du Puy and Cribb 2007; Liu et al. 2009)。和名は駿河蘭で、駿河において中国産品種を栽培・増殖したとの説もあるが、これには否定的な意見が多く、和名の由来は不明である（牧野 1961；黒崎 1982；小田倉 1982)。本種は、江戸時代中期には園芸的に栽培されており（渡辺 1978；黒崎 1982；小田倉 1979、1982；小田倉・深田 1988)、九州西部に生育する本種は、元々日本に自生していたのか、中国産栽培品種の帰化種であるのか不明である（牧野 1961；前川 1971; 渡辺 1978；小田倉 1979、1982、1990；里見 1982；鈴木 1986; 小田倉・深田 1988)。本種は、葉が強直で立ち上がる系統をオラン（雄蘭)、葉がしなやかでゆるやかに湾曲する系統をメラン（雌蘭；*C. ensifolium* f. *flaccidior*)、日本自生株をジラン（地蘭)、中国福建省の漳州に産することから建蘭、漳蘭などとも呼称される（渡辺 1978；小田倉 1982；小田倉・深田 1988)。スルガランの形態は、葉は扁平で滑らか、幅広く、長さは 60-90 cm と大きい（小田倉 1982；里見 1982；環境庁 2000)。花は黄緑色で唇弁には汚紫色の斑点がある。芳香性の一茎多花 (5-10 花) である。開花期は夏 (6 月—10 月) である (小田倉 1982；里見 1982)。

スルガランは、レッドデータブックでは絶滅危惧 IA 類に挙げられており（環境省 2012)、現存個体数は 250 未満であると推定されている (環境庁 2000)。本種の分布は上述の通り九州西部であるが、著者の一人の黒萩が、平成 15 年に愛媛県愛南町において、葉形態に特徴のあるシュンラン属の実生を発見し、系統保存のために栽培したところ、平成 24 年・25 年と開花に至り、スルガランであることを確認した（図 1)。

今回発見した愛媛県産スルガランの形態は、花苞は 5.52-13.2 mm、外花弁は 4.93-6.86 mm、内花弁は 4.93-6.86 mm、花柄長は 20 cm 以上であった。唇弁に紅色の斑点がある黄緑色の 9 花をつけた。葉幅は広く（16.87 mm)、

* 責任著者:　早川宗志

茨城県つくば市観音台 3-1-3（独）農業環境技術研究所

Tel: 029-838-8312, Fax: 029-838-8199, E-mail: hhayakawa@affrc.go.jp

最大葉長は 60 cm 以上であった。葉が厚いため葉先は立直し、花序は葉の茂りの中で咲いていた。2013 年 8 月に開花した後（図 1A）、同個体は 2013 年 9 月末から 10 月にかけて再度 2 花序が開花した（図 1B-C）。いずれの花序も花数は 6 であった。証拠標本（August/21/2013 Y.Tokuoka et al. HH033）は、高知県立牧野植物園標本庫（MBK）に寄贈した。

熊本県天草島におけるスルガランの分布は、海岸からの距離が 4 km 以内、標高が 300 m 以下、温量指数が 140 度付近であり、カンラン（*C. kanran* Makino）やコラン（*C. koran* Makino）とは分布が異なることが報告されている（渡辺 1978）。本愛媛県産スルガランの分布は、海岸から 3-4 km、標高約 100 m、御荘の 1981-2010 年の各月平均気温から気温逓減率を 0.6 とした場合の温量指数（WI）は 146 であったため、渡辺（1978）の報告と一致していた。したがって、スルガランの日本における分布は、渡辺（1978）が指摘しているように海岸沿いの暖かい低山であることが示唆された。他方、中国自生地でのスルガランは標高 600-1800 m に分布する（Liu et al. 2009）。中国自生地での気象条件は不明であるが日本と中国の自生地における分布の違いは、日本がスルガランの分布の北限であることを考慮すると、渡辺（1978）や黒崎（1982）が指摘するように、黒潮が影響する温暖な地方や島において、スルガランは野生条件下でも生育可能であると考えられる。

スルガランは、愛媛県東予の林道沿いから他種と共に土ごと投棄したと疑われる個体が発見されている（松井宏光氏　私信）。一方、本採集地は、林道から 50 m 程度離れた山中の小川に近い砂地であった。採集地の上層はコジイやコナラなどの広葉樹が覆っていた。本採集地は、人が物を捨てるために立ち入るような場所ではないこと、山師から本採集地において 40 年ほど前に珍しいランがあったっという話を聞いていたこと、葉身長 10-15 cm、幅 5 mm 程度の 1 葉の実生を採集したことより、人為的な投棄ではなく、自生個体であると判断した。

2005 年に施行された特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（略称「外来生物法」）では、明治維新（1868 年）以降に持ち込まれた植物のことを外来種と定義している。そのため、もし仮に、スルガランが中国栽培品種の逸出であったとしても、上記定義に従えば外来種でなく、江戸時代もしくは 15 世紀以降に逸出した新帰化植物（近世帰化植物）である。スルガランは、過去には、鹿児島県、四国南部、紀伊半島からも採集記録があるとされており（渡辺 1978）、今回発見した愛媛県産スルガランが、隔離分布した希少な自生個体であるのか、中国産栽培品の逸出であるのかは不明である。いずれにしても、愛媛県レッドデータブック（2003）にはスルガランが記載されていないことから、今回の発見は自生株としては愛媛新産である可能性がある。四国西南部は多くの希少な南方系野生ランの自生地であるため、その自生環境を保全していかなければならない。

謝辞

有益な助言を頂いた濱地秀徳氏ならびに橋越清一氏に深謝します。標本閲覧を許可していただいた高知県立牧野植物園標本庫（MBK）の藤川和美氏と新谷直子氏にお礼申し上げます。本研究の一部は、公益財団法人福武財団の瀬戸内海文化研究・活動支援助成によって行われました。ここに記して御礼申し上げます。

引用文献

Du Puy D. and Cribb P. 2007. The Genus *Cymbidium*. Kew Publishing, Richmond, UK.

愛媛県貴重野生動植物検討委員会. 2003. 愛媛県レッドデータブック～愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物～. 447p. 愛媛県民環境部環境局自然保護課、愛媛県. <http://www.pref.ehime.jp/030kenminkankyou/080shizenhogo/00004541040311/>

環境庁(編). 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物–レッドデータブック–8. 植物 I（維管束植物）. 660p. 財団法人自然環境研究センター, 東京.

環境省. 2012. The 4th version of the Japanese Red Lists-Plants I. <http://www.env.go.jp/press/file_view.php?serial=20557&hou_id=15619>

黒崎陽人. 1982. 東洋蘭譜. 246p. 樹石社, 東京.

Liu Z., Chen X., P. J. Cribb. 2009. *Cymbidium*. In: Zhengti W., P.H.Raven, H. Deyuan (eds.) Flora of China illustrations Vol. 25: Orchidaceae. pp. 260–280. Science Press, Beijing & Missouri Botanical Garden Press, Missouri.

前川文夫. 1971. *Cymbidium*. In: 前川文夫(編)原色日本のラン. pp. 399–428 & 478–478. 誠文堂新光社, 東京.

牧野富太郎. 1961. するがらん（おらん）. In:前川文夫、原寛、津山尚（編）牧野新日本植物図鑑. p. 902. 北隆館, 東京.

小田倉正圀．1979．スルガラン．In:小田倉正圀（編）日本の野生ラン．pp. 78–81．主婦と生活社、東京．
小田倉正圀．1982．スルガラン・メラン．In：小田倉正圀（編）野生ラン．pp. 210–213．婦人生活社、東京．
小田倉正圀．1990．スルガラン．In:小田倉正圀（編）野生らんの育て方小百科．pp. 92–95．日本文芸社、東京．
小田倉正圀・深田考彦．1988. 野生ランの栽培と増殖―入門種から一般種、栽培困難種までの育て方・ふやし方．pp. 76–77.池田書店、東京．
里見信生．1982．ラン科. *In*: 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫 (編), 日本の野生植物 Vol. I, pp. 187–235．平凡社, 東京．
鈴木吉五郎．1986．シュンラン属. In: 鈴木吉五郎（編）続/野生ランの栽培. pp. 210–236．誠文堂新光社, 東京．
渡辺定元．1978．天草のコラン・スルガランについて（一）．北陸の植物25(4): 70–76．

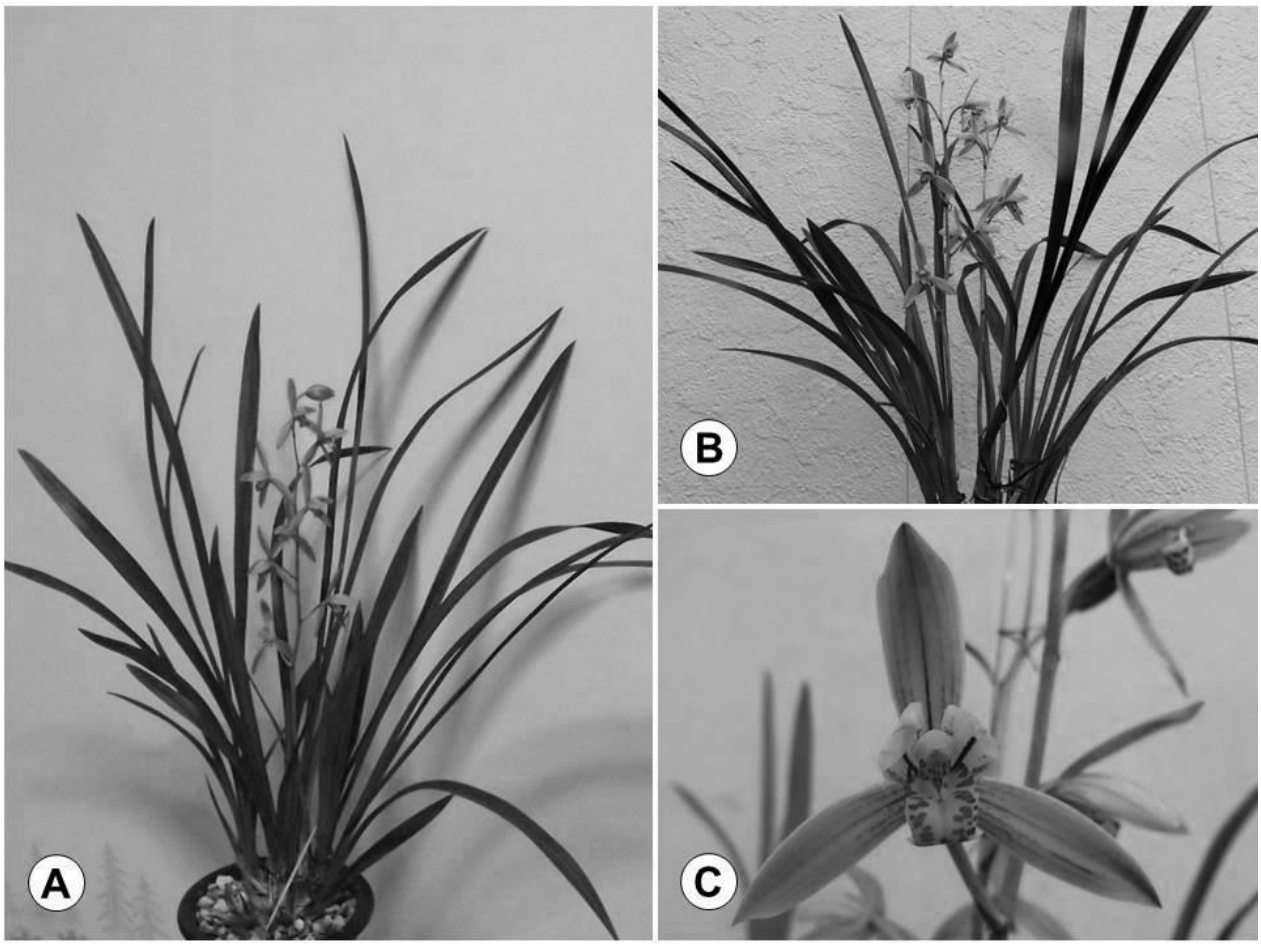

図1．愛媛県産スルガランの写真．採集後10年．A:スルガランの草姿．2013年8月21日撮影．B:スルガランの草姿．2013年10月6日撮影．C:スルガランの花．2013年10月1日撮影．